

虞美人草「駄舌」分析

Junko Higasa 2014.1.24

結婚問題に絡んで、母は口先で「藤尾の面倒を見てやってください」でも「まず御前の方から先に極めないと」と言った。それに対して欽吾はペン先で「駄舌」と答えた。その思考経路はまず「鳥」という文字から始まる。次に一本棒を足して「鳥」になる。更に書き足して「駄」になり「駄舌」となる。

【まず鳥のようなダミ声で語る母の鳥のような黒い陰謀が意味不明。兄より先に妹鳥の巣立ち（結婚）を「夫（きめる）」なら彼女に財産を「夫（わける）」事は可能だ。しかし長男である自分が先に結婚を「夫（きめる）」と、その時点で全権相続するわけだから、あとから藤尾に財産を「夫（わける）」ことができないのではないか。母の言うことは矛盾していて訳が分からない「駄舌」だ】

これは家督相続と財産相続を分断した当時の法律のわかりにくさに対する苦言ではないだろうか。旧法と新法に混乱している 20 世紀の女である藤尾の母に例えられた「鳥」は、当世社会の歪みであろう。

漱石は各小説に様々な「女性の結婚問題」を含ませたが、その視点はいつも男女共存社会へ向けられている。『三四郎』では兄が結婚すれば妹の居場所はない。『こころ』では女性の生活は男性にかかっている。『行人』では、長兄夫婦と未婚の弟妹が同居する。

そのように社会における男女の権利の推移の中で、漱石は人間の尊厳を見つめたのではないだろうか。